

# 半七捕物帳

津の国屋

岡本綺堂

青空文庫



秋の宵であった。どこかで題目太鼓の音がきこえる。この場合、月並の鳴物だとは思いつながら、じつと耳をすまして聴いていると、やはり一種のさびしさを誘い出された。

「七偏人が百物語をしたのは、こんな晩でしょうね」と、わたしは云い出した。

「そうでしょうよ」と、半七老人は笑っていた。「あれは勿論つくり話ですけれど、百物語なんていうものは、昔はほんとうにやったもんですよ。なにしろ江戸時代には馬鹿に怪談が流行りましたからね。芝居にでも草双紙にでも無暗むやみにお化けが出たもんです」

「あなたの御商売の畑にもずいぶん怪談がありますよね」

「随分ありますが、わたくし共の方の怪談にはどうもほんとうの怪談が少なくて、しまいへ行くとだんだんに種の割れるのが多くって困りますよ。あなたにはまだ津の国屋のお話はしませんでしたっけね」

「いいえ、伺いません。怪談ですか」

「怪談です」と、老人はまじめにうなずいた。「しかもこの赤坂にあったことなんです。

これはわたくしが正面から掛り合つた事件じゃありません。桐畑の常吉という若い奴が働いた仕事で、わたくしはその親父の幸右衛門という男の世話になつたことがあつた關係上、蔭へまわつて若い者の片棒をかついでやつたわけですから、いくらか聞き落しもあるかも知れません。なにしろ随分入り組んでいる話で、ちよいと聴くと何だか嘘らしいようですが、まがいなしの実録、そのつもりで聴いて下さい。昔と云つても、たつた三四十年前ですけれども、それでも世界がまるで違つていて、今の人には思いも付かないようなことが時々ありました」

赤坂裏<sup>うらてん</sup>伝馬<sup>まちよう</sup>町の常磐津の女師匠文字春が堀の内の御祖師様へ参詣に行つて、くたびれ足を引き摺つて四谷の大木戸まで帰りついたのは、弘化四年六月なかばの夕方であつた。赤坂から堀の内へ通うには別に近道がないでもなかつたが、女一人であるからなるべく繁華な本街道を選んだのと、真夏の暑い日ざかりを信<sup>しがらき</sup>樂の店で少し休んでいたのとで、女の足でようよう江戸へはいつたのは、もう夕六ツ半（七時）をすぎた頃で、さすがに長いこの頃の日もすっかり暮れ切つてしまつた。

甲州街道の砂を浴びて、気味のわるい襟元の汗をふきながら、文字春は四谷の大通りを

まつすぐに急いでくる途中で、彼女は自分のあとに付いてくる十六七の娘を見かえった。

「姐ねえさん。おまえさん何処へ行くの」

この娘は、さつきから文字春のあとになり先になつて、影のように付きまどつて来るのであつた。うす暗がりではよくは判らないが、路みちばた傍の店の灯でちらりと見たところは、色の蒼白い、瘡やせ形の娘で、髪は島田に結つて、白地に撫なでしこ子を染め出した中ちゆうがた形の浴衣ゆかたを着ていた。

唯それだけなら別に仔細もないのであるが、彼女はとにかくに文字春のそばを離れないで、あたかも道連れであるかのようにこすり付いて歩いてくる。それがうるさくもあつたが、おそらく若い娘の心寂しいので、ただ何がなしに人のあとを追つて来るのであろうと思つて、初めは格別に気にも止めなかつたが、あまりしつこく付きまどつて来るので、文字春もしまいには忌いやな心持になつた。なんだか薄気味悪くもなつて来た。

しかし相手は屑細かほそい娘である。まさかに物取りや巾着きんちやく切りでもあるまい。文字春は今年二十六で、女としては大柄の方であつた。万一相手の娘がよくない者で、だしぬけに何かの悪さを仕掛けたとしても、やみやみ彼女に負かされる程のこともあるまいと多寡たかをくくつていたので、文字春はさのみ怖いとも恐ろしいとも思つていなかつたのであるが、何

分にも自分のあとを付け廻してくるのが気になってならなかった。彼女はだんだんに気味が悪くなって来て、物取りや巾着切りなどということを通り越して、なにか一種の魔物ではないかとも疑いはじめた。死に神か通り魔か、狐か狸か、なにかの妖怪が自分に付きまっつわつて来るのではないかと思うと、文字春は俄かにぞつとした。彼女はもう強がつてはいられなくなつて、数珠じゆずをかけた手をそつとあわせて、口のうちでお題目を一心に念じながら歩いて来たのであつた。それでも無事に大木戸を越して、もう江戸へはいつたと思うと、彼女は又すこし気が強くなつた。灯ともし頃とはいいいながら、賑やかな真夏のゆうがたで、両側には町屋まちやもある。かれはここまで来た時に、はじめて思い切つてその娘に声をかけたのである。声をかけられて、娘は低い声で遠慮勝ちに答えた。

「はい。赤坂の方へ……」

「赤坂はどこです」

「裏伝馬町というところへ……」

文字春はまたぎよつとした。本来ならば丁度いい道連れともいうべきであるが、この場合  
に彼女はとてもそんなことを考えてはいられなかつた。彼女はどうして此の娘が自分の  
ゆく先を知っているのであろうと怪しみ恐れた。彼女は左右を見かえりながら又訊いた。

「おまえさんは裏伝馬町のなんという家を訪ねて行くの」

「津の国屋という酒屋へ……」

「そうして、おまえさんは何処から来たの」

「八王子の方から」

「そう」

とは云つたが、文字春はいよいよおかしく思った。近いところと云つても、八王子から江戸の赤坂まで辿つて来るのは、この時代では一つの旅である。しかも見たところでは、この娘はなんの旅支度もしていない。笠もなく、手荷物もなく、草鞋すらも穿いていない。彼女は浴衣の裳さえも引き揚げないで、麻裏の草履を穿いているらしかった。若い女がこんな悠長らしい姿で八王子から江戸へ来る——それがどうも文字春の腑に落ちなかつた。しかし一旦こうして詞をかけた以上、こつちも逃げ出すわけにもゆかず、先方でもいよいよ付きまといつて離れまいと思つたので、彼女はよんどころなく度胸を据えて、この怪しい道連れの娘と話しながら歩いた。

「津の国屋に誰か知っている人でもあるの」

「はい。逢いにいく人があります」

「なんとという人」

「お雪さんという娘に……」

お雪というのは津の国屋の秘蔵娘で、文字春のところへ常磐津の稽古に来るのであった。怪しい娘が自分の弟子をたずねてゆく——文字春は更に不安の種をました。お雪は今年十七で、町内でも評判の容貌好しである。津の国屋は可なりの身代で、しかも親達が遊芸を好むので師匠にとつては為になる弟子でもあった。文字春は自分の大切な弟子の身の上がなんとなく危ぶまれるので、根掘り葉ほりに詮索をはじめた。

「そのお雪さんを前から識っているの」

「いいえ」と、娘は微かに答えた。

「一度も逢ったことはないの」

「逢ったことはありません。姉さんには逢いましたけれど……」

文字春はなんだか忌な心持になった。お雪の姉のお清は、今から十年前に急病で死んだのである。それにしても此の娘がどうしてそのお清を識っているのかを、彼女は更に詮議しなければならなかった。

「死んだお清さんはお前さんのお友達なの」

娘は黙っていた。

「おまえさんの名は」

娘はやはり俯向うつむいてなんにも云わなかった。こんなことを云っているうちに、あたりはもう夜の景色になつて、そこらの店先の涼み台では賑やかな笑い声もきこえた。それでも文字春はなんだかうしろが見られて、どうしてもこの怪しい娘に対する疑いが解けなかった。彼女は黙つてあるきながら横眼に覗くと、娘の島田はむごたらしいように崩れかかつて、その後れ毛おくが蒼白い頬の上にふるえていた。文字春は絵にかいた幽霊を思い出して、いよいよ薄気味悪くなつて来た。いくら賑やかな町なかでも、こんな女と連れ立つてあるくのは、どう考えてもいい心持ではなかった。

四谷の大通りを行き尽すと、どうしても暗い寂しい御堀端を通らなければならぬ。文字春は云い知れない不安に襲われながら、明るい両側の灯をうしろに見て、御堀端を右に切れると、娘はやはり俯向うつむいて彼女について来た。松平佐渡守の屋敷前をゆき過ぎて、間あいの馬場まで来かかった時に、娘のすがたは暗い中にふつと消えてしまった。おどろいて左右を見まわしたが、どこにも見えない。呼んでみたが返事も無い。文字春はぞつとして惣くろ身が鳥肌になつた。彼女はもう前へ進む勇氣はないので、転ころげるように元来た方面へ引つ

返して、大通りの明るいところへ逃げて来た。

「おい、師匠。どうした」

声をかけられてよく視ると、それは同町内に住んでいる大工の兼吉であった。

「あ、棟梁とうりょう」

「どうした。ひどく息を切つて、何かいたずら者にも出っ食わしたのかえ」

「え。そうじゃないけれど……」と、文字春は息をはずませながら云った。「おまえさん、町内へ帰るんでしよう」

「そうさ。友達のところへ行つて、将棋をさして置いて遅くなつちまったのさ。師匠は一体どっちの方角へ行くんだ。」

「あたしも家へ帰るの。後生ごしょうだから一緒に行つてくださいな」

兼吉はもう五十ばかりであるが、男でもあり、職人でもあり、こういう時の道連れにはくつきょう屈くつきょう 竟きやうだと思われたので、文字春はほつとして一緒にあるきだした。それでも馬場の前を通りぬける時には襟元から水を浴びせられるように身をちぢめながら歩いた。さつきからの様子がおかしいので、兼吉はなにか仔細があるらしく思つて、暗い堀端を歩きながらだんだん聞き出すと、文字春は声を忍ばせながら一切の事情を話した。

「あたしは最初からなんだか気味が悪くってしようがなかったんですよ。別にこうということもないんですけど、唯なんだか忌な心持で……。そうすると、とうとう途中でふいと消えてしまうんですもの。あたしは夢中で四谷の方へ逃げだして、これからどうしようかと思つているところへ丁度棟梁が来てくれたので、あたしも生きかえつたような心持になつたんですよ」

「そりゃあ少し変だ」と、兼吉も暗いなかで声を低めた。「師匠。その娘は十六七で、島田に結ゆつていたと云つたね」

「そうよ。よく判らなかつたけれど、色の白い、ちよいといい娘このようでしたよ」

「なんで津の国屋へ行くんだらう」

「お雪さんに逢いに行くんだって……。お雪さんには初めて逢うんだけれど、死んだ姉さんには逢つたことがあるようなことを云つていました」

「むむう。そりゃあいけねえ」と、兼吉は溜息をついた。「又来たのか」

文字春は飛び上がつて、兼吉の手をしっかりと掴んだ。彼女は唇をふるわせて訊いた。

「じゃあ、棟梁。おまえさん、あの娘を知つていのかえ」

「むむ。可哀そうに、お雪さんも長いことはあるめえ」

文字春はもう声が出なくなつた。かれは兼吉の手に獅噛み付いたままで、ふるえながら引き摺られて行つた。

## 二

自分の家の前まで無事に送り届けて貰つて、文字春は初めてほんとうに自分の魂を取り戻したような心持になつた。彼女は自分を送つて来てくれた礼心に、兼吉を内へ呼び込んで、茶でも一杯のんで行けと勤めた。彼女は小女と二人暮しであるので、すぐその小女を使に出して、近所へ菓子を買いにやりなどした。兼吉もことわり兼ねてあがり込むと、文字春は団扇をすすめながら云つた。

「ほんとうに今夜はおかげさまで助かりました。信心まいりも<sup>あて</sup>的にやあならない。あたしは余つぽど罪が深いのかしら。それにしても氣になつてならないのは……。あの娘が津の国屋へたずねて行くというのは、一体どういう訳なんでしょうね」

彼女は兼吉を無理に呼び込んだのも、実はこの恐ろしそうな秘密を聞き出したためであつた。兼吉も初めはいい加減に詞を<sup>ことば</sup>にごしていたが、自分がうっかり口をすべらしてし

まった以上、その詞質ことばじちを取って問い詰めるので、彼もとうとう白状しないわけには行かなくなつた。

「出入り場の噂をするように良くねえが、師匠はおいらから見ると半分も年が違うんだから、なんにも知らねえ筈だ。その娘は自分の名をなんとか云つたかえ」

「いいえ。こつちで訊いても黙っているんです。おかしいじゃありませんか」

「むむ。おかしい。その娘の名はお安というんだろうと思う。八王子の方で死んだ筈だ」  
文字春はいよいよ身を固くして、ひと膝のり出した。

「そうです、そうですよ。八王子の方から来たと言っていましたよ。じゃあ、あの娘は八王子の方で死んだんですか」

「なんでも井戸へ身を投げて死んだという噂だが、遠いところの事だから確かには判らねえ。身を投げたか首をくくつたか、どつちにしても変死には違げえねえんだ」

「まあ」と、文字春は真つ蒼になつた。「一体どうして死んだんでしょうね」

「こんなことは津の国屋でも隠しているし、おいら達も知らねえ顔をしているんだが、おめえは今夜その道連れになつて来たというから、まんざら係り合いのねえこともねえから」

「あら、棟梁、忌いやですよ。あたしなんにも係り合いませんよ」

「まあさ。ともかくも其の娘と一緒に来たんだから、まんざら因縁のねえことはねえ。それだから内所ないしよでおめえにだけは話して聞かせる。だが、世間には沙汰無しだよ。おいらがこんな事をしやべったなんていうことが津の国屋へ知れると、出入り場を一軒しくじるような事が出来るかも知れねえから。いいかえ」

文字春は黙つてうなずいた。

「おいらも遠い昔のことはよく知らねえが、親父なんぞの話を聞くと、あの津の国屋という家は三代ほど前から江戸へ出て来て、下谷の津の国屋という酒屋に奉公していたんだが、三代前の主人というのはなかなかの辛抱人で、津の国屋の暖簾のれんを分けて貰つてこの町内に店を出したのが始まりで、とんとん拍子に運が向いてきて、本家の津の国屋はどうに潰れてしまつたが、こつちはいよいよ繁昌になるばかりで、二代目三代目と続いて来た。ところが、今度の主人夫婦になつてから子供が出来ねえ。主人はもう三十を越したもんだから、早く貰い子でもせぎあなるめえというので、八王子にいる遠縁のものからお安という娘を貰つて、まあ可愛がつて育てていたんだ。すると、そのお安が十歳とおになつた時に、今まで子種がねえと諦めていたおかみさんの腹が大きくなって、女の子が生まれた。それがお清という娘で、貰い娘のお安と姉妹きょうだいのように育てていたが、そうなると人情で生みの子

が可愛い、貰い娘が邪魔になる。といって、世間の手前もあり、貰い娘の親たちへの義理もあり、かたがたどうすることも出来ないので、ゆくゆくはお清に家督を嗣<sup>つ</sup>がせ、貰い娘の方には婿を取って分家させるといふようなことを云つていたんだが、そうなると今度は又金が惜しい。分家させるには相当の金が要<sup>い</sup>る。こんなことから貰い娘をだんだん邪魔にし始めて……。といっても、世間の眼に立つようなことはしない。うわべは生みの娘と同じように育てているうちに、二番目の娘がまた生まれた。それが今のお雪さんだ。そうして実子が二人まで出来てみると、貰い娘の方はいよいよ邪魔になるだろうじゃねえか」

「ほんとうにねえ」と、文字春も溜息をついた。「いつそ貰い子が男だと、妻<sup>めあ</sup>わせるといふことも出来るんだけど、みんな女じやどうにもなりませんわね」

「それだから困る。いつそ其のわけを云つて、貰い娘は八王子の里へ戻してしまつたらよさそうなものだったが、そうもゆかねえ訳があると見えて、その貰い娘のお安ちゃんが十七になつた時に、とうとう追い出してしまった。勿論、ただ追い出すという訳にやゆかねえ。店へ出入りの屋根屋の職人と情交<sup>わけ</sup>があるというので、それを廉<sup>かど</sup>に追<sup>お</sup>い返してしまつたんだ」

「そんなことは嘘なんですか」

「どうも嘘らしい」と、兼吉は首をふった。「その職人は竹と云つて、年も若し、面付きこそ人並だが、酒はのむ、博奕は打つ、どうにもこうにもしようのねえ野郎だ。お安ちゃんはおとなしい娘だ。よりに扱つてあんな野郎とどうのこうのというわけがねえ。それでも津の国屋ではそれを云い立てにして、着のみ着のまま同様でお安ちゃんを里へ追い返してしまつたんだ。世間にこそ知れねえが、それまでも内輪では貰い娘を何か邪慳じゃけんにしたこともあるだろうし、お安という娘もなかなか利巧者だから、親たちの胸のうちも大抵さとつていたらしい。それだから、いよいよ追い出される時には大変に口惜くやしがつて、自分は貰い子だから実子が出来た以上、離縁されるのも仕方がない。けれども、ほかの事と違つて、そんな淫いたずら奔べんをしたという濡衣ぬれぎぬをきせて追い出すというのはあんまりだ。里へ歸つて親兄弟や親類にも顔向けが出来ない。きつとこの恨みは晴らしてやるというようなことを、仲のいい老婢ばあやに泣いて話したそうだ」

「まあ、可哀そうだわねえ」と、文字春も眼をうるませた。「それからどうしたの」

「それから八王子へ歸つて、間もなく死んでしまつたという噂だ。今もいう通り、身を投げたか首をくくつたか知らねえが、なにしろ津の国屋を恨んで死んだに相違ねえ。娘はまあそれとして、その相手と決められた屋根屋の竹の野郎がおとなしく黙っているのがおか

しいと思つていると、それからふた月ばかり経たねえうちに、ちやうど夏の炎天に出入り場の高い屋根へあがつて仕事をしている時、どうしたはずみか真つ逆さまにころげ落ちて、頭をぶち割つてそれぎりよ。そうなると世間では又いろいろのことを云つて、竹の野郎は津の国屋から幾らか貰つて、得心とくしんずくで黙つていたに相違ねえ。あいつが変死をしたのは娘のおもいだと、まあこういうんだ」

「怖いわねえ。悪いことは出来ないわねえ」と、文字春は今更のように溜息をついた。

「どつちにしてもお安という娘は死ぬ、その相手だという竹の野郎もつづいて死ぬ。それでまあ市いちが栄えたいという訳なんだが、ここに一つ不思議なことは、忘れもしねえ今から丁度十年前……。これは師匠も知つていられるだろうが、津の国屋の実子のお清さんがぶらぶら病いで死んでしまった。そりやあ老ろう少しょう不定ふじょうで寿命じゆんずくなら仕方しかたもねえわけだが、その死んだのが丁度十七の年で、先せんのお安という娘と同年だ。お安も十七で死んだ。お清も十七で死んだ。こうなるとちつとおかしい。表向きには誰もなんとも云わねえが、先の貰い娘の一件を知つているものは、蔭でいろいろのことを云つている。それにもう一つおかしなのは、あのお清さんの死ぬ前にちやうど今夜のようなことがあつたんだ」

「棟梁」

「いや、おどかす訳じゃあねえ」と、兼吉はわざと笑ってみせた。「実はね、津の国屋の惣領娘がわずらいつく二、三日まえの晩に、近所の者が外へ出ると、町内の角で一人の娘に逢った。娘は撫子なでしこの模様の浴衣ゆかたを着て……」

「もう止してください。わかりましたよ」と、文字春はもう身動きが出来なくなったらしく、片手を畳に突いたままで眼を据えていた。

「いや、もうちつとだ。その娘がどうしても津の国屋の貰い娘のお安ちゃんに相違ねえので、思わず声をかけようとする、娘の姿は消えてしまったという話だ。おいらもその話がかねて聞いていたが、なにを云うのかと思つて碌に気にも留めずにしたが、今夜の師匠の話の聴いてみると、成程それも嘘じゃなかつたらしい。そのお安ちゃんが又お迎いにやつて来たんだ。津の国屋のお雪ちゃんは今十七になつたからね」

台所でかたりという音がきこえたので、文字春はまたぎよつとした。菓子を買に行つた小女が今ようやく帰つて来たのであつた。

文字春はその晩おちおち眠られなかつた。撫子の浴衣を着た若い女が蚊帳かやの外から覗いているような夢におそわれて、少しうとうとするかと思うとすぐに眼がさめた。あいにくに蒸し暑い夜で、彼女の枕紙はびつしより濡れてしまった。あくる朝も頭が重くて胸がつかえて、あさ飯の膳にむかう気にもなれなかつた。きのう遠路とよみちを歩いたので暑さにあつたのかも知れないと、小女の手前は誤魔かしていたが、彼女の頭のなかは云い知れない恐怖に埋められていた。仏壇には線香を供えて、彼女はよそながらお安という娘の回向えこうをしていた。

近所の娘たちはいつもの通りに稽古に來た。津の国屋のお雪も來た。お雪の無事な顔を見て、文字春はまずほつと安心したが、そのうしろには眼にみえないお安の影が付きまどつてゐるのではないかと思うと、彼女はお雪と向い合うのがなんだか薄気味悪かつた。稽古が済むと、お雪はこんなことを云い出した。

「お師匠しよさん、ゆうべは変なことがあつたんですよ」

文字春は胸をおどらせた。

「かれこれ五ツ半（午後九時）頃でしたらう」と、お雪は話した。「あたしが店の前の縁台に腰をかけて涼んでいると、白地の浴衣を着た……丁度あたしと同一年くらいの娘が家

の前に立つて、なんだか仔細ありそうに家の中をいつまでも覗いているんです。どうもおかしな人だと思っていると、店の長太郎も気がついて、なにか御用ですかと声をかけると、その娘は黙ってすうと行つてしまつたんです。それから少し経つと、知らない駕籠屋が来て駕籠賃をくれと云いますから、それは間違いだろう、ここの家で駕籠なんかに乗つた者はないと云うと、いいえ、四谷見附のそばから娘さんを乗せて来ました。その娘さんは町内の角で降りて、駕籠賃は津の国屋へ行つて貰つてくれと云つたから、それでここへ受け取りに来たんだと云つて、どうしても肯きかないんです」

「それから、どうして……」

「それでも、こつちじや全く覚えがないんですもの」と、お雪は不平らしく云つた。「番頭も帳場から出て来て、一体その娘はどんな女だと訊くと、年ごろは十七八で撫子の模様の浴衣を着ていたと云うんです。してみると、たつた今この店を覗いていた娘に相違ない。そんないい加減なことを云つて、駕籠賃を踏み倒して逃げたんだらうと云っていると、奥からお父つさんが出て来て、たとい嘘にしろ、津の国屋の暖簾さを指されたのがこつち不祥だ。駕籠屋さんに損をさせては気の毒だと云つて、むこうの云う通りに駕籠賃を払つてやったら、駕籠屋も喜んで帰りました。お父つさんはそれぎりでお奥へはいつてしまつて、

別になんにも云いませんでしたけれど、あとで店の者たちは、ほんとうに今どきの娘は油断がならない。あんな生なまわか若わかい癖に駕籠賃を踏み倒したりなんかして、あれがだんだん増長すると騙かたりや美人局つつもたせでもやり兼ねないと……」

「そりや全くですわね」

なにげなく相あいづち槌ちを打っていたが、文字春はもう正面からお雪の顔を見ていられなくなつた。騙りや美人局どころの話ではない。かの娘の正体がもつともつと恐ろしいものであることを、お雪は勿論、店の者たちも知らないのである。そのなかで主人一人がなんにも云わずに素直に駕籠賃を払ってやったのは、さすがに胸の奥底に思いあたることがあるからであろう。お安の魂は、御堀端で自分に別れてから、さらに駕籠屋に送られて津の国屋まで乗り込んで来たのである。なんにも知らないで其の話をしているお雪のうしろには、きつと撫子の浴衣の影が煙けむのように付きまわっているに極まった。それを思うと、文字春は恐ろしくもあり、また可哀そうでもあつた。

慾得なしみずくばかりでなく、かれは弟子師匠の人情から考えても、久しい馴染なしみの美しい弟子がやがて死しりよう靈りょうに憑とり殺されるのかと思うと、あまりの痛ましさに堪えなかつた。さりとてほかの事とは違つて、迂濶うかつに注意することもできない。それが親達の耳にはいつて、師

匠はとんでもないことを云うと掛け合い込まれた時には、表向きにはなんとも云い訳がでない。もう一つには、そんなことをうっかりお雪に注意して、自分が死霊の恨みをうけては大変である。それやこれやを考えると、文字春はこのまま口を閉じてお雪を見殺しにするよりほかはなかった。

重ねがさね忌な話ばかり聞かされるのと、ゆうべ碌々に眠らなかつた疲れとで、文字春はいよいよ気分が悪くなつて、午ひるからは稽古を休んでしまった。そうして、仏壇に燈明を絶やさないうようにして、ゆうべ道連れになつたお安の成じょうぶつ 仏を祈り、あわせてお雪と自分との無事息災を日頃信心する御祖師様に祈りつづけていた。その晩も彼女はやはりおちおち眠られなかつた。

あくる日も朝から暑かつた。お雪は相変らず稽古に來たので、文字春はまず安心した。こうして二日も三日も無事につづいたので、彼女が恐怖の念も少し薄らいできて、夜もはじめて眠られるようになった。しかし撫子の浴衣を着たお安の亡霊がたしかに自分と道連れになつて來たことを考えると、まだ滅多に油断はできないと危ぶんでいると、それから五日目になつて、お雪は稽古に來た時にこんなことを又話した。

「お母おつかさんがきのうの夕方、飛んでもない怪我をしましたの」

「どうしたんです」と、文字春は又ひやりとした。

「きのうの夕方もう六ツ過ぎでしたらう。阿母さんが二階へなにか取りに行くとき、階子はしごのうえから二段目のところで足を踏みはずして、まつさかさまに転げ落ちて……。それでもいい塩梅に頭を撲ぶたなかつたんですけれど、左の足を少し挫くじいたようで、すぐにお医者にかかってゆうべから寝ているんです」

「足を挫いたのですか」

「お医者はひどく挫いたんじゃないと云いますけれど、なんだか骨がずきずき痛むと云つて、けさもやっぱり横になつています。いつもは女中をやるんですけれど、ゆうべに限つて自分が二階へあがつて行って、どうしたはずみか、そんな粗相そそうをしてしまつたんです」

「そりゃほんとうに飛んだ御災難でしたね。いずれお見舞にうかがいますから、どうぞ宜しく」

お安の祟たたりがだんだん事実となつて現われて来るらしいので、文字春は身もすくむようにおびやかされた。気のせいか、お雪の顔色も少し蒼ざめて、帰つてゆくうしろ姿も影が薄いように思われた。何にしてもそれを聞いた以上、彼女は知らない顔をしているわけに

もゆかないので、進まないながらも其の日の午すぎに、近所で買った最中の折を持って、津の国屋へ見舞に行った。津の国屋の女房お藤はやはり横になっていたが、けさにくらべると足の痛みは余ほど薄らいだとのことであった。

「お稽古でお忙がしい処をわざわざありがとうございますとごございました。どうも思いもよらない災難で飛んだ目に逢いました」と、お藤は眉をしかめながら云った。「なに、二階の物干へ洗濯物を取込みに上がったんです。いつも女中がするんですけれど、その女中が怪我をしましてね。井戸端で水を汲んでいるうちに、手桶をさげたまますべつて転んで、これも膝っ小僧を擦り剥いたと云つて跛足を引いているもんですから、わたしが代りに二階へあがる」と又この始末です。女の跛足が二人も出来てしまつて、ほんとうに困ります」

それからそれへと死霊の祟りがひろがつてくるらしいので、文字春はいよいよ恐ろしくなつた。こんなところにとても長居はできないので、かれは早々に挨拶をして逃げ出して来た。明るい往来に出て、初めてほつとしながら見かえると、津の国屋の大屋根に大きな鴉が一匹じつとして止まつていた。それが又なんだか仔細ありそうにも思われたので、文字春はいよいよ急いで帰つて来た。そのうしろ姿を見送つて、鴉は一と声高く鳴いた。

津の国屋の女房はその後十日ほど寝ていたが、まだ自由に歩くことが出来なかつた。

そのうちに文字春は又こんな忌な話を聞かされた。津の国屋の店の若い者が、近所の武家屋敷へ御用聞きにゆくと、その屋根瓦の一枚が突然その上に落ちて来て、彼は右の眉のあたりを強く打たれて、片目がまったく腫れふさがってしまった。その若い者は長太郎といつて、このあいだの晩、自分の店先で撫子の浴衣を着た娘に声をかけた男であることを、文字春はお雪の話で知った。おそろしい祟りはそれからそれへと手をひろげて、津の国屋の一家眷属いっかけんぞくにわざわいするのではあるまいか。津の国屋ばかりでなく、しまいには自分の身のうえにまで振りかかつて来るのではあるまいかと恐れられて、文字春は実に生きている空もなかつた。

かれは程近い円通寺のお祖師様へ日参にっさんをはじめた。

#### 四

津の国屋の女房お藤の怪我はどうもはかばかしく癒らなかつた。何分にも足の痛みどころであるから、それを悪くこじらせて打ち身のようになっても困るといふ心配から、そのころ浅草の馬道うまみちに有名な接骨ほねつぎの医者があるといふので、赤坂から馬道まで駕籠に乗つ

て毎日通うことにした。

七月の初め、むかしの暦でいえばもう秋であるが、残暑はなかなか強いのと、その医者  
は非常に繁昌で、少し遅く行くといつまでも玄関に待たされるおそれがあるので、お藤  
は努めて朝涼あさすずのうちに家を出ることにしていた。けさも明け六ツ（午前六時）を少しす  
ぎた頃に津の国屋の店を出て、お藤は待たせてある駕籠に乗る時にふと見ると、一人の僧  
が自分の家にむかつて何か頻りに念じているらしかった。この間じゆうからいろいろの禍  
いがつづいている矢先であるので、お藤はなんとなく気にかかって、そのまま見過ごして  
ゆくことが出来なくなった。かれは立ち停まって、じつとその僧の立ち姿を見つめている  
と、彼女を送つて出た小僧の勇吉も、黙つて不思議そうに眺めていた。

僧は四十前後で、まず普通の托鉢僧という姿であった。托鉢の僧が店のさきに立つ――  
それは別にめずらしいことでもなかったが、ここらでかつて見馴れない出家であるのと、  
気のせいか彼の様子が何となく普通とは変つて見えるので、お藤は駕籠によりかかったま  
までしばらく眺めていると、僧はやがて店の前を立ち去つて、お藤の駕籠のそばを通りす  
ぎる時に、口のうちでつぶやくように云うのが聞えた。

「凶宅じゃ。南無阿弥陀仏、なむあみだぶつ」

「あ、もし」と、お藤は思わず彼をよび止めた。「御出家様にちよいと伺いますが、何かこの家に悪いことでもございますか」

「死霊の祟りがある。お気の毒じやが、この家は絶えるかも知れぬ」

こう云い捨てて彼は飄ひょうぜん然ぜんと立ち去った。お藤は蒼くなって跛足をひきながら内へころげ込んで、夫の次郎兵衛にそれを訴えると、次郎兵衛も一旦は眉を寄せたが又思い直したように笑い出した。

「坊主なんぞは兎角そんなことを云いたがるものだ。ここの家に怪我人がつづいたということは何処からか聞き込んで来て、こつちの弱味に付け込んでなにか嚇おどかして祈祷料でもせしめようとするのだ。今どきそんな古い手を食つてたまるものか。きつと見ろ。あした又やつて来て同じようなことを云うから」

「そうですかねえ」

夫の云うことにも成程とうなずかれる節があるので、お藤は半信半疑でそのままに駕籠に乗った。しかも其の僧の姿が眼先にちら付いて、彼女は浅草へゆく途中も頻しきりにその真偽を疑っていたが、往きにも復かえりにも別に変わった出来事もなかった。あくる朝、かの僧は津の国屋の店先に姿を見せなかった。そうなると、一種の不安がお藤の胸にまた湧いて来

た。かの僧が果たして人を嚇して何分かの祈祷料をせしめる料簡であるならば、嚇したままで姿を見せない筈はあるまい。彼が再びこの店先に立たないのを見ると、やはりそれは真実の予言で、彼は夫がひと口に貶けなしてしまったような商売まいずくの卑しい売僧まいすではないと思われた。店の者にも注意して店先を毎日窺うかがわせたが、かの僧はそれぎり一度も姿をあらわさなかった。

勿論、店の者どもにも固く口止めをして置いたのであるが、小僧の巳之助が町内の湯屋でうっかりそれをしゃべったので、その噂はすぐに近所にひろまった。文字春の耳にもはいった。さなきだに此の間からおびえている彼女は、その噂を聞いていよいよ恐ろしくなった。彼女は往来で大工の兼吉に逢ったときにささやいた。

「ねえ、棟梁。どうかしようはないもんでしようかね。お安さんの祟りで、津の国屋さんは今に潰つぶれるかも知れませんかよ」

「どうも困ったもんだ」

出入り場の禍いをむなしく眺めているのは、いかにも不人情のようではあるが、問題が問題であるだけに、差し当りどうすることも出来ない、兼吉も顔をしかめながら云った。彼は文字春にむかって、いつそお前が津の国屋へ行つて、お安の幽霊と道連れになつたこ

とを正直に話したらどうだと勧めたが、文字春は身ぶるいをして頭かぶりをふった。そんなことを迂濶に口走って、自分がどんな祟りを受けるかも知れないと、彼女はひたすら恐れていた。

こんなわけで、文字春は津の国屋の運命を危ぶむばかりでなく、自分の身の上までが不安でならなかった。彼女は毎日稽古に通ってくるお雪を見るのさえ薄気味悪くて、いつも其のうしろにはお安の亡霊が影のように付きまとっているのではないかと恐れられてならなかった。そのうちにこんな噂が又もや町内の女湯から伝わった。

津の国屋の女中でお松という、ことし二十歳はたちの女が、夜の四ツ（十時）少し前に湯屋から帰ってくると、薄暗い横町から若い女がまぼろしのように現われて、すれ違いながらお松に声をかけた。

「早く暇をお取んなさいよ。津の国屋は潰れるから」

びつくりして見返ると、その女の姿はもう見えなかった。お松は急に怖くなつて息を切つて逃げて帰った。主人にむかつて真逆まさかにそんなことを打ち明けるわけにも行かないので、彼女は朋輩のお米よねにそつと話すと、お米は又それを店の者どもに洩らした。店の者ばかりでなく、女湯へ行つてもお米はそれを近所の人達に話した。それがまた町内の噂の種にな

った。

いつの代にも、すべてのことが尾鰭おひれを添えて云い触らされるのが世間の習いである。まして迷信の強いこの時代の人たちは、こうした忌な噂がたびたび続くのを決して聞き流している者はなかった。噂はそれからそれへと伝えられて、津の国屋には死霊の祟りがあるということが、単に湯屋髪結床かみゆいどこの噂話ばかりでなく、堅気かたぎの商人あきんどの店先でもまじめにささやかれるようになって来た。

あしたが草市くさいちという日に、お雪はいつものように文字春のところへ稽古に来た。丁度ほかに相弟子しよの不在を見て、彼女は師匠に小声で話した。

「お師匠さん。おまえさんもお聞きでしょう。あたしの家には死霊の祟りがあるとかいう噂を……」

文字春はなんと返事をしていいか、少しゆき詰まったが、どうも正直なことを云いにくいので、彼女はわざと空とぼけていた。

「へえ。そんなことを誰か云うものがあるんですか。まあ、けしからない。どういうわけでしょうかねえ」

「方々でそんなことを云うもんですから、お父っさんや阿母おつかさんもう知っているんです。

阿母さんは忌な顔をして、あたしのこの足ももう癒らないかも知れないと云っているんですよ」

「なぜでしょうね」と、文字春は胸をどきつかせながら訊いた。

「なぜだか知りませんが」と、お雪も顔を曇らせていた。「お父っさんや阿母さんも其の噂をひどく気に病んで、丁度お盆前にそんな噂をされると何だか心持がよくないと云っているんですの。誰が云い出したんだか知りませんが、まったく気になりますわ。津の国屋の前には女の幽霊が每晚立っているなんて、飛んでもないことを云われると、嘘だと思っても気味が悪うござんす」

文字春はお雪が可哀そうでならなかった。お雪はなんにも知らないに相違ない。知らなければこそ平気でそんなことを云っているのである。むしろ正直に何もかも打ち明けて、なんとか用心するように注意してやりたいとは思ったが、どうも思い切ってそれを云い出すほどの勇気がなかった。かれはいい加減の返事をして其の場を済ませてしまった。

盆休みが過ぎてから、お雪は師匠のところへ来て又こんなことを云った。

「お師匠さん。家のお父っさんは隠居して坊主となると云い出したのを、阿母さんや番頭が止めたんで、まあ思い止まることになったんですよ」

「坊主に……」と、文字春もおどろいた。「旦那が坊主になるなんて、一体どうなすつたんでしようねえ」

十二日の朝、菩提寺の住職が津の国屋へ来た。柵たなぎょう經きやうを読んでしまつてから、彼は近ごろ御親類中に御不幸でもござつたかと訊いた。この矢先に突然そんなことを訊かれて、津の国屋の夫婦もぞつとした。併しなんにも心当りはないと答えると、住職は首をかしげて黙つていた。その素振りがなんとなく仔細ありそうにも見えたので、夫婦はだんだん問いつめると、この頃三夜ほど続いて、津の国屋の墓のまえに若い女の姿けむが煙けむのように立っているのを、住職はたしかに見とどけたというのであつた。着物の色模様ははつきりとは判らなかつたが、白地に撫子を染め出してあつたように見えたので、住職はさらに説明した。それでもやはり心あたりはないと云い切つて、夫婦は相当の御経料を贈つて、住職を帰してやつたが、その夕方からお藤の足はまた強く痛み出した。次郎兵衛も気分が悪いと云つて宵から寝てしまった。夜なかに夫婦が交る交るに唸り出したので、家うちじゅうの者がおどろいて起きた。お藤の痛みは翌日幸いに薄らいだが、次郎兵衛はやはり気分が悪いと云つて、飯も碌々に食わないで半日は寝たり起きたりしていたが、午すぎから寺まいりに出で行つた。しかしその晩、迎い火を焚く時に、主人だけは門かどぐち口へ顔を出さなかつた。

十五の送り火を焚いてしまつてから、次郎兵衛は女房と番頭とを奥の間へ呼んで、自分  
 はもう隠居すると突然云い出した。女房は勿論おどろいたが、番頭の金兵衛もびっくりし  
 て、主人にその仔細を聞き糺したが、次郎兵衛はくわしい説明をあたえなかつた。しかし  
 それが十三日の午すぎに寺まいりに行って、住職となにか相談の結果であるらしいことは  
 想像された。主人が突然の隠居に対して、金兵衛はあくまでも反対であつた。女房のお藤  
 もやはり不同意で、たとい隠居するにしても、娘に相当の婿をとつて初孫ういまいの顔でも見た  
 上でなければならぬと主張した。その押し問答のあいだに、次郎兵衛は単に隠居するば  
 かりでなく、隠居と同時に出家しゅつけする決心であることが判つたので、女房も番頭もおど  
 ろいた。二人は涙を流して一晌いっしきあまりも意見して、どうにかこうにか主人の決心をにぶ  
 らせた。

「お父っさんがああ云うのも無理はないけれど、今だしぬけにそんなことをされちゃあ、  
 この津の国屋の店もどうなるか判らないからねえ」と、お藤はあくる朝、むすめのお雪に  
 そつと話した。

この話をきかされて、文字春は肚はらのなかでうなずいた。津の国屋の主人が隠居して頭を  
 刈り丸めようとする仔細も大抵さとられた。おそらく菩提寺の住職に因果を説かれて、お

安の死霊の恨みを解くために、俄かに発心ほっしんして出家を思い立ったのであろう。女房や番頭がそれに反対したのも無理はないが、見す見す死霊に付きまどわれて津の国屋の店をかたむけるよりも、お雪に然るべき婿を取つて自分は隠居してしまつた方が、むしろ安全ではあるまいかとも思われた。しかし、そんなことを滅多めったに口にすべきものではないので、彼女は黙つてお雪の話を聴いていた。

## 五

それから五、六日経つと、津の国屋の女中のお米よめがまたおどされた。それはやはりかのお松が怪しい女に出逢つたのと同じ刻限で、かれも町内の湯屋から帰る途中であつた。その晩は雨がしとしと降つていたので、お米は番傘をかたむけて急いでくると、途中で足駄あしだを踏みかえして鼻緒をふつりと切つてしまった。何分にも薄暗い路ばたでどうすることも出来ないで、かれは鼻緒の切れた足駄をさげて片足は跣足はだしであるき出そうとすると、傘のかげから若い女の白い顔が浮き出して、低い声で云つた。

「津の国屋は今に潰つぶれるよ」

お松の話の聴いているので、お米は急に怖くなった。かれは思わずきやつと叫んで、持っていた足駄をほうり出して、片足の足駄も脱いでしまつて、跣足で自分の店へ逃げて帰つたが、年のわかいかれは店へかけ込むと同時にぼったり倒れて気を失つた。水や薬の騒ぎでようように息を吹きかえしたが、お米はその夜なかから大熱を発して、取り留めもない讒言うわごとを口走るようになった。

「津の国屋は今に潰れるよ」

かれは時々こんなことも云つた。主人夫婦は勿論、店の者共も気味を悪がつて、病人のお米を宿へ下げてしまつた。その駕籠の出るのをみて、近所の者はまたいろいろの噂を立てた。こんなことが長く続いていれば、店は次第にさびれるに決まっているので、番頭の金兵衛もひどく心配していたが、幸いにお藤の足の痛みはだんだんに薄らいで、もう此の頃では馬道へ通わないでも済むようになった。次郎兵衛は店の商売などはどうでもいいというようなふうで、毎日かならず朝と晩とには仏壇の前に座つて念仏を唱えていた。

それらの事はお雪の口からみな文字春の耳にはいるので、彼女はいよいよ暗い心持になつて、津の国屋は遅かれ早かれどうしても潰れるのではあるまいかと危ぶまれた。

八月になつて、津の国屋にもしばらく変つたこともなかつたが、十二日の宵に奥の間の

仏壇から火が出て、代々の位牌も過去帳も残らず焼けてしまった。宵の口のことであるから、大勢がすぐに消し止めて幸いに大事にはならなかったが、場所もあろうに仏壇から火が出たということが家内の人々を又おびやかした。

「お燈明の火が風にあおられたのです」と、番頭の金兵衛は云った。

この矢先に又こんなことが世間に聞えてはよくないと、金兵衛は努めてそれを秘かくして置こうとしたが、誰がしやべるのか近所ではすぐに知ってしまった。女中のお松ももう居たまれなくなつたと見えて、その月の末に親が病氣だというのを口実にして、無理に暇を取つて行つた。先月にはお米が宿へ下がつて、今月はお松が立ち去り、出代り時でもないのに女中がみな居なくなつてしまつたので、津の国屋では台所働きをする者に差し支えた。近所の桂庵けいあんでも忌な噂を知つていたので、容易に代りの奉公人をよこさなかつた。

「この頃は阿母おつかさんとあたしが台所で働くんですよ」と、お雪は文字春に話した。「それでも阿母さんはまだほんとうに足が良くないんですから、あたしが成るだけ働くようにしています。今だからよごんすけれど、だんだん寒くなると困りますわ」

そういうわけであるから当分は稽古にも来られまいとお雪はしおれた。稽古はともかくも、今まで大きな店で育つているお雪が毎日の水仕事は定めて辛かろうと、文字春も涙ぐ

まれるような心持で、不運な若い娘の顔を眺めていると、お雪はまた云った。

「お父っさんは隠居するのも、坊さんになるのも、まあ一旦は思い止まったんですけど、この頃になつて又どうしても家には居られないと云い出して、ともかくも広徳寺前のお寺へ当分行つていることになつたんです。阿母さんや番頭が今度もいろいろに止めたんですけれど、お父っさんはどうしても肯きかないんだから仕方ありません」

「坊さんになるんじゃないんでしょう」

「坊さんになる訳じやないんですけれど、なにしろ当分はお寺の御厄介になつていて、ほかの坊さん達が暇な時には、御経を教えて貰うことになるんですって。なんと云つても肯かないんだから、阿母さんもうあきらめてくれるようです」

「でも、当分はお寺へ行つていて、気が少し落ち着いたら却つていいかも知れませんね」と、文字春は慰めるように云つた。「その方がお家の為かも知れませんよ。そうなると、あとは阿母さんと番頭さんとで御商売の方をやって行くことになるんですね。それでも番頭さんが帳場に坐つていなされば大丈夫ですわ」

「ほんとうに金兵衛がいなかつたら、家は闇です。あとは若い者ばかりですから」

番頭の金兵衛は十一の年から津の国屋へ奉公に来て、二十五年間も無事に勤め通して今

年三十五になるが、まだ独ひとり身みで実直に帳場を預かっている。ほかには源蔵、長太郎、重四郎という若い者と、勇吉、巳之助、利七という小僧がいる。それに主人夫婦とお雪と、都合十人暮しの家内に対して、女中二人では今迄でも少し無理であったところへ、その女中がみな立ち去ってしまったのは、これだけの人間に三度の飯を食わせるだけでも容易でない。その苦勞を思いやると、文字春はいよいよお雪を可哀そうに思ったが、まさかに手伝いに行つてやるわけにもゆかないので、これからだんだんに寒空にむかつて、お雪の白い柔らかい手先に痛ましいひびの切れるのをむなしく眺めているよりほかはなかつた。

「それでも小僧さんが少しは手伝つてくれるでしょう」

「ええ。勇吉だけはよく働いてくれます」と、お雪は云つた。「ほかの小僧はなんにも役に立ちません。暇さえあれば表へ出て、犬にからかつたりなんかしているばかりで……」  
「なるほど勇どんはよく働くようですね」

勇吉は金兵衛の遠縁の者で、やはり十一の年から奉公に来て、まだ六年にしかならないが、年の割にはからだも大きく人間も素捷すばやい方で、店の仕事の合い間には奥の用にも身を入れて働く。若い者のうちでは長太郎がよく働く。彼は十九で、さきに屋根瓦が落ちて傷つけられた時にも、頭と顔を白布で巻いて、その日からいつもの通りに働いていたのを、

文字春も知っていた。

それから二日の後に、津の国屋の主人は下谷広徳寺前の菩提寺へ引き移った。主人は寺のひと間を借りて当分はそこに引き籠っているのであると、津の国屋では世間に披露していたが、近所では又いろいろの噂をたてて、津の国屋の主人はどうとう坊主になったとか、少し気が触れたとか、思い思いの想像説を伝えていた。

九月も十日をすぎて、朝晩はもう薄ら寒くなつて来た。文字春は午ひるまえ前の稽古をすませ、午から神明の祭りに参詣しようと思つて、着物などを着かえていると、台所の口で案内を求める声がきこえた。小女が出てみると、もう五十近い女が小腰をかがめて会えしやく釈した。

「あの、お師匠しよさんはお家うちでしようか」

狭い家でその声はすぐにこつちへも聞えたので、文字春はあわてて帯をむすびながら出た。

「おまえさんがお師匠さんでございませうか」と、女は改めて会釈した。「だしぬけにこんなことを願ひに出ますのも何でございませうが、お師匠さんはあの津の国屋さんとお心安くしておいでなされるそうでございますね」

「はあ、津の国屋さんとは御懇意にしています」

「うけたまわりますと、あの店では女中さんが無くって困っているとか申すことですが……。わたくしは青山に居ります者で、どこへか御奉公に出たいと存じて居りますところへ、そんなお噂をうかがいましたもんですから、わたくしのような者で宜しければ、その津の国屋さんで使つて頂きたいと存じまして……。けれども、桂庵の手にかかるのは忌いやでございませし、津の国屋さんへだしぬけに出ますのも何だか変でございませしから、まことに御無理を願つて相済みませんが、どうかお師匠さんのお口添えを願いたいと存じまして……」

「ああ、そうですか」

文字春も少しかんがえた。だんだんに寒空にむかつて、津の国屋で奉公人に困っているのは判り切つている。年は少し老とつているし、あまり丈夫そうにも見えないが、この女一人が住み付いてくれれば津の国屋でもどのくらい助かるかもしれない。お雪も水仕事をしないで済むかも知れない。まことにいい都合であると思つたが、なにをいうにも相手は初対面の女である。身許みもとも気心もまるで知れないものを迂濶に引き合わせる訳には行かないと、彼女はしばらくその返答に躊躇していると、女もそれを察したらしく、気の毒そうに云つた。

「だしぬけに出ましてこんなことを申すのですから、定めて胡乱うろんな奴とおぼしめすかも知れませんが、いよいよお使いくださいと決まりますれば、身許もくわしく申し上げます。決しておまえさんに御迷惑はかけませんから」

「じゃあ、少しここに待っていてください。ともかくも向うへ行つて訊いて来ますから」  
出先でちょうど着物を着かえているのを幸いに、文字春はすぐに津の国屋へ駈けて行つた。女房に逢つてその話をする、津の国屋では困り切っている最中であるので、すぐにその奉公人を連れて来てくれと云つた。

「お師匠さんのおかげで助かります」と、お雪もしきりに礼を云つた。  
文字春は皆から礼を云われて、善いことをしたと喜びながら家へ歸つて、すぐにその女を津の国屋へ連れて行つた。女はお角かくといつて、年が年だけに応待も行儀もひと通り心得ているらしいので、津の国屋では故障なしに雇い入れることに決めた。

## 六

三日の目見めみえ得もとどこおりなく済んで、お角は津の国屋へいよいよ住み込むことになつ

た。お雪は菓子折を持って文字春のところへ礼に来た。新参ながらお角はひどく女房の気に入っているという話を聞いて、文字春もまず安心した。

お角も礼に来た。それが縁になって、お角は使に出たついでなどに文字春のところへ顔を出した。そうして、やがて一と月ほど無事にすぎた時に、お角はいつものように訪ねて来て、文字春となにかの話の末にこんなことをささやいた。

「お師匠さんにもいろいろ御厄介になったんですが、わたくしは津の国屋に長く辛抱できればいいがと思つていますが……」

「でも、大変におかみさんの氣に入つていふというじゃありませんか」と、文字春は不思議そうに訊いた。

「全くおかみさんは目にかけて下さいますし、お雪さんも善い人ですから、なにも不足はないのでございますが……」

云いかけて彼女は口をつぐんだ。それを押し詰めて詮議すると、津の国屋の女房お藤は番頭の金兵衛と不義を働いているというのであった。金兵衛は男盛りの独身者であるが、お藤はもう五十を越えている。まさかにそんな不埒を働く筈はあるまいと、文字春も初めは容易に信用しなかつたが、お角はその怪しい形跡をたびたび認めたとするのである。土

蔵の奥や二階のひと間へ不義者がそつと連れ立ってゆくのを、自分はたしかに見とどけたと彼女は云った。

「併しそんなことがいつまでも知れずには居りませんまい」と、お角は溜息をついた。「もし何かの面倒が起りました時に、わたくしが手引きでも致したように思われましては大変でございます」

主人の女房と家来とが密通の手引きをした者は、その時代の法としては死罪である。お角が津の国屋に奉公をしているのを恐れるのも無理はなかった。お角は暇をとれば、それで済むが、済まないのは女房と番頭との問題で、万一それが本当であるとすれば、津の国屋が潰れるような大騒動がしゅつたい出きめん来するに相違ない。死霊の祟りよりもこの祟りの方がて靦て面に怖く思われて、文字春はまた蒼くなつた。

しかし彼女はまだ一途いちずにお角の話を信用することも出来ないのです、そんなことを迂濶に口外してはならぬと、くれぐれもお角に口止めをして帰した。

よもやとは思いながら、文字春も幾らかの疑いを懐かないわけには行かなかつた。お雪は父が自分から進んで菩提寺へ出て行ったように話していたが、あるいは女房と番頭とがな狎れ合いでうまく勧めて追い出したのではあるまいかと疑われた。年も五十を越して、

ふだんは物堅いように見えていた女房に、そんな恐ろしい魔が魅ますというのも、やはり死霊の祟りではあるまいかとも恐れられた。

お安という女の執念はいろいろの祟りをなして、結局、津の国屋をほろぼすのではあるまいかとも思われた。併しこればかりは、文字春は誰に話すことも出来なかつた。お雪にかまをかけて聞き出すことも出来なかつた。

「いくら願つても、お暇をくださらないので困ります」

お角はその後にも来て文字春に話した。この間からお暇を願っているが、おかみさんがどうしても肯いてくれない。お給金が不足ならば望み通りにやる。年の暮には着物も買つてやる。こつちでは十分に眼をかけてやるから、せめて来年の暖くなるまで辛抱してくれと云われるので、こつちもさすがにそれを振り切つて出ることも出来ないので困っている。お角はしきりに愚痴をこぼしていた。かれが暇を願っているのは事実であるらしく、お雪も文字春のところへ来てそんなことを話した。お角はいい奉公人であるから、なんとかして引き留めて置きたいと阿母さんもふだんから云っていると、彼女はなんの秘密も知らないように話していた。

自分が世話をした奉公人が評判がいいのは結構であるが、もし津の国屋の内輪うちわにそんな

秘密が忍んでいるとすれば、その奉公人を周旋した自分の身の上にどんな係り合いが起らないとも限らないと、文字春はそれがためにまた余計な苦勞を増した。併しその後も別に何事もなしに過ぎて、今年ももう師走のはじめになった。底寒い日が幾日もつづいて、時々大きい霰あられが降った。

「おい、師匠。もう起きたかえ」

師走の四日の朝、もう五ツ（午前八時）を過ぎたころに、大工の兼吉が文字春の家の格子をあけた。

「あら、棟梁。なんぼあたしだつて……。もうこのとおり、朝のお稽古を二人も片付けたんですよ。節季せつきしわす師走じやありませんか」

「そんなに早起きをしているなら知っているのかえ。津の国屋の一件を……」

「津の国屋の……。どうしたんです。何かあつたんですか」と、文字春は長火鉢の上へ首を伸ばした。

「とんでもねえことが出来てしまって、ほんとうに驚いたよ」と、兼吉も火鉢の前に坐つて、まず一服すつた。

「おかみさんと番頭さんが土蔵のなかで首をくくつたんだ」

「まあ……」

「全くびつくりするじゃねえか。何ということだ。呆あきれてしまった」

兼吉は罵るように云いながら、火鉢のこべり小縁で煙管きせるをぼんぼんと叩くと、文字春の顔の色は灰のようになった。

「どうしたんでしようねえ、心中でしようか」と、彼女は小声で訊いた。

「まあ、そうらしい。別に書置らしいものも見当らねえようだが、男と女が一緒に死んでいりや先ずお定まりの心中だろうよ」

「だって、あんまり年が違うじゃありませんか」

「そこが思案のほかとでもいうんだろう。出入り場のことを悪く云いたかねえが、あのおかみさんも一体よくねえからね。いつかも話した通り、お安という貰い娘こをむごく追い出したのも、おかみさんが旦那に吹っ込んだに相違ねえ。そんなことがやっぱり崇こまっているのかも知れねえよ。なにしろ津の国屋は大騒ぎさ。二人も一度に死んでいるんだから、内分にも何にもなることじゃあねえ。取りあえず主人を下谷から呼んでくるやら、御検視を受けるやら、家じゆうは引つくり返るような騒動だ。なんと云っても出入り場のことだから、おいらも今朝から手伝いに行つてはいるが、娘と奉公人ばかりじゃあどうすることも

出来ねえので弱っている」

「そうでしようねえ」

お角の話が今更のように思い合わされて、文字春は深い溜息をついた。

「それで御検視はもう済んだんですか」

「いや、御検視は今来たところだ。そんなところにうろついていると面倒だから、おいらはちよいとはずして来て、御検視の引き揚げた頃に又出かけようと思っっているんだ」

「それじゃあ、あたしももう少し後に行きましよう。そんな訳じゃあお悔みというのも変だけれど、まんざら知らない顔も出来ませんからね」

「そりゃあそうさ。まして師匠はあすこの家まで幽霊を案内して来たんだもの」

「いやですよ」と、文字春は泣き声を出した。「後生ごしやうですから、もうそんな話は止して

下さいよ。なんの因果で、あたしはこんな係り合いになったんでしょうねえ」

半晌はんときあまりも過ぎて、兼吉は再び出ていった。文字春はこわごわながら門口かどぐちへ出て

見ると、近所の人達もみな門かどに出てなにか頻りにいろいろの噂をしていた。津の国屋のまえにも大勢の人があつまって内を覗いていた。きょうも朝から雲った日で、灰を凍らせたような暗い大空が町の上を低く掩っていた。

「おい、師匠。御近所がちつと騒々しいね」

声をかけられて見返ると、それはここらを縄張りに行っている岡っ引の常吉であった。桐畑の幸右衛門はこのごろ隠居同様になって、俵の常吉が専ら御用を勤めている。彼はまだ二十五六の若い男で、こんな稼業には似合わないおとなしやかな色白の、人形のような顔かたちが人の眼について、人形常という綽名あだなをとっているのであった。

人に可愛がられない商売でも、男は男、しかも人形の常吉に声をかけられて文字春は思わず顔をうすく染めた。かれは袖口で口を掩いながら初心うぶらしく挨拶した。

「親分さん。お寒うございます」

「ひどく冷えるね。冷えるのも仕方がねえが、また困ったことが出来たぜ」

「そうですつてね。もう御検視は済みましたか」

「旦那方は今引き揚げるところだ。就いては師匠、おめえにちつと訊きてえことがあるんだが、後に来るよ」

「はあ、どうぞ、お待ち申しております」

常吉はそのまま津の国屋の方へ行ってしまった。文字春はあわてて内へは行って、別の着物を出して着換えた。帯も締めかえた。そうして、長火鉢へたくさんの炭をついだ。か

れは津の国屋の一件について、なにかの係り合いになるのを恐れながら、一方には常吉の来るのを迷惑には思っていないかった。

## 七

「師匠。内かえ」

常吉が文字春の家の格子をくぐったのは、それから一晌とときほどの後であった。文字春は待ち兼ねていたように、すぐに長火鉢のまえを起つて出た。

「さきほどは失礼。きたないところですが、どうぞこちらへ……」

「じゃあ、ちつと邪魔をするぜ」

若い岡つ引が草履をぬいで内へあがると、文字春は小女に耳打ちをして、近所の仕出し屋へ走らせた。

「ところで、師匠。早速だが、少しおめえに訊きてえことがある。あの津の国屋の娘はおめえの弟子だというじゃあねえか。師匠も津の国屋へときどき出這入りすることもあるんだらう」

「はあ。時々には……」と、文字春はうなずいた。「ですから、きょうも後にちよいと顔出しをしようと思っっているんです」

「ところで、素人しろうとっぽいことを訊くようだが、今度の一件についてなんにも心当りはねえかね。おいらの考えじゃあ、おかみさんと番頭の心中はどうも呑み込めねえ。あれには何か込み入ったわけがあるだろうと思うんだが……。おいらは前から知っているが、あの金兵衛という番頭は白鼠で、そんな不埒を働く人間じゃあねえ。ましておかみさんとは母子おやこほども年が違っている。たとい一緒に死んだとしても、心中じゃあねえ。何かほかに仔細てがあるに相違ねえ。今の処じやあ年の若けえ娘と奉公人ばかりで、何を調べても一向に手て応えがねえので困っているんだが、師匠、決しておめえに迷惑はかけねえ。なにか気のついたことがあるんなら教えてくんねえか」

「そうですねえ。親分も御承知でしょう。なんだか津の国屋にいやな噂のあることは……」  
「いやな噂……」と、常吉もうなずいた。「なにかあの店が潰れるとかいうんじゃあねえか」  
「そうですよ。あたしはよく知りませんが、津の国屋にはお安さんとかいう娘の死霊ごが崇たかまっているとかという噂ですが……」

「娘の死霊……。そりやあおいらも初耳だ。そうして、その娘はどうしたんだ」

相手が乗り気になつて耳を引き立てるので、文字春は自然に釣り出されたのと、もう一つには常吉に手柄をさせてやりたいというような下<sup>したころ</sup>心をまじつて、彼女はさきに兼吉から聞かされたお安の一件をくわしく話した。まだその上に自分がお祖師様へ参詣の帰り路で、お安の幽霊らしい若い娘と道連れになつたことまで怖<sup>こわ</sup>々とささやくと、常吉はいよいよ熱心に耳をかたむけていた。殊に文字春が幽霊のような娘に出逢つたということが彼の興味を惹いたらしかつた。彼はその娘の年ごろや人相や服装<sup>みなり</sup>などを一々明細に聞いた。だして、自分の胸のうちに畳み込んでいるように見えた。

「むむ。こりやあいいことを聞かしてくれた。師匠、あらためて礼をいうぜ、そんなことはちつとも知らなかつた」

仕出し屋から逃えの肴を持ち込んで来たので、文字春はすぐに酒の支度をした。

「こりやあ気の毒だな。こんな厄介になつちやあいけねえ」と、常吉はここから気の毒そうに云つた。

「いいえ、ほんの寒さしのぎにひと口、なんにもごぎいませんけれど、あがつてください」「じゃあ、折角だから御馳走になろう」

二人は差し向いで飲みはじめた。その間に、文字春は津の国屋の一件について、自分の

知つてゐるだけのことを残らずしゃべってしまった。女中のお角は自分が世話をしたんだということも打ち明けた。これも常吉の注意を惹いたらしく、彼はときどきに猪口ちよこをおいて考えていた。なんだか残り惜しそうに引き留める師匠をふり切つて、彼は半晌ほどの後にここを出た。

「まだ御用がたくさんある。いい心持に酔つちやあいられねえ。また来るよ」

彼は幾らかの金をつつんで、文字春が辞退するのを無理に押しつけるようにして置いて行つた。霰はまだ時々にはらばらと降つていた。常吉はその足で再び津の国屋へ引つ返して、なにかの手伝いをしている大工の兼吉を表へ呼び出して、お安のことをもう一度訊きただした。それから女中のお角をよび出して、女房と番頭との関係についても一応詮議すると、お角は文字春にも話した通り、たしかに二人が密会しているらしい証跡を見とどけたと云つた。しかし自分は新参者で、それにはなんにも関係のないということを繰り返して弁解していた。常吉はそれだけの調べを終つて、更に八丁堀へ顔を出すと、同心たちの意見も心中に一致して、もう詮議の必要を認めないような口ぶりであつた。それでも此の時代に於いては、主人と奉公人との密通は重大事件であるから、なにか新しく聞き込んだことがあつたならば、油断なく更に詮議しろとのことであつた。常吉はお安の幽霊一

件を同心らの前ではまだ発表しなかった。ただ自分には少し腑に落ちないところがあるから、もう一と足踏み込んで詮議してみたいというだけのことを断わって帰って来た。彼はそれからすぐに神田三河町の半七をたずねて、何かしばらく相談して別れた。

その次の日の午過ぎに津の国屋から女房お藤の葬とむらい式が出た。しかし番頭と心中したという事になって以上、無論に表向きの葬式を営むことも出来ないの、日の暮れるのを待つてこつそりと棺桶をかつぎ出した。近所の者もわざと遠慮して、大抵は見送りに行かなかった。文字春も津の国屋へ悔みに行っただけで、葬式の供には立たなかった。大工の兼吉と店の若い者二人と、親類の総代が一人、唯それだけの者が忍びやかに棺のあとについて行つた。内福と評判されている津の国屋のおかみさんの葬式があつた姿とは、心柄とはいいながらあんまり哀れだと近所の者もささやきあつていた。世間に対して面目ないせいもあるう、主人の次郎兵衛は奥に閉じ籠つたきりで、ほとんど誰にも顔をあわせなかったが、初しよなの七日のすむのを待つて再び寺へ帰るとの噂であつた。

女房も番頭も同時に世を去つて、あとは若い娘のお雪ひとりである。その上に主人が寺へ帰つてしまつたらば、誰が店を取り締つて行くであろう、と近所では専ら噂していた。文字春も不安でならなかつた。死霊の祟りで津の国屋はどうとう潰れてしまうのかと、彼

女はいよいよおそろしく思った。

そのうちに初七日も過ぎたが、次郎兵衛はやはり津の国屋を立ち退かなかつた。彼はあまりに意外の出来事におどろかされて、葬式の出たあくる日から病気になって、どつと床に就いているのだと伝えられた。店の方は休みも同様で、二、三人の親類が来て家内の世話をしているらしかった。

津の国屋の初七日が過ぎて三日の夜であつた。文字春は芝のおなじ稼業の家に不幸があつて、その悔みに行つた帰り途に、溜池の縁ふちへさしかつたのはもう五ツ（午後八時）を過ぎた頃であつた。津の国屋といい、今夜といい、とかくに忌なことがばかり続くので、文字春もいよいよ暗い心持になつた。早く帰るつもりであつたのが思いのほか時に時を費したので、暗い寂しい溜池のふちを通るのが薄気味が悪かつた。今日こんにちと違つて、山王山の麓をめぐる大きい溜池には河かわ瀬うせが棲むという噂もあつた。幽霊の娘と道連れになつたことなどを思い出して、文字春はぞつとした。月のない、霜ぐもりとでも云いそうな空で、池の枯かれ蘆あしのなかでは雁の鳴く声が寒そうにきこえた。文字春は両袖をしっかりとかきあわせて、自分の下駄の音にもおびやかされながら、小股に急いで来ると、暗い中から駈けて来た者があつた。

避ける間もなしに両方が突き当たったので、文字春はぎよつとして立ちすくむと、相手はあわただしく声をかけた。

「早く来てください。大変です」

それは若い女、しかも津の国屋のお雪の声らしいので、文字春はまた驚かされた。

「あの、お雪さんじゃありませんか」

「あら、お師匠さん。いいところへ……。早く来てください」

「一体どうしたの」と、文字春は胸を躍らせながら訊いた。

「店の長太郎と勇吉が……」

「長どんと勇どんが……。どうかしたんですか」

「出刃庖丁で……」

「まあ、喧嘩でもしたんですか」

暗い中でよく判らないが、お雪はふるえて息をはずませているらしく、もう碌々に返事もしないので、師匠の足もとにべったりと坐ってしまった。

「しっかりおしなさいよ」と、文字春は彼女を抱き起しながら云った。「そうして、その二人はどこにいるんです」

「なんでもそこらに……」

なにしろ暗いので、文字春にはちつとも見当が付かなかった。水明かりでそこらを透かしてみたが、近いところでは二人の人間があらそっている様子も見えなかった。仕方がなしに彼女は声をあげて呼んだ。

「もし、長さん、勇さん……。そこらにいますか。長さん……。勇さん……」

どこからも返事の声はきこえなかった。暗さは暗し、不安はいよいよ募ってくるので、文字春はお雪の手を引いて、明るい灯の見える方角へ一生懸命にかけ出した。

## 八

半分は夢中で自分の家のまえまで駆けて来て、文字春は初めてほっと息をついた。よく見ると、お雪も真つ蒼になって、今にも再び倒れそうにも思われたので、ともかくも家中へ連れ込んで、ありあわせの薬や水を飲ませた。すこし落ち着くのを待って今夜の出来事を聞きただすと、それは又意外のことであった。

今夜お雪が店先へ出ると、あとから若い者の長太郎がついて来て、少し話があるから表

までちよいと出てくれというので、なに心なく一緒に出ると、長太郎は突然に短刀を抜いて彼女の眼の先に突きつけた。そうして、そこまで黙って一緒に来いとおどした。相手が鋭い刃物を持っているのにおびやかされて、お雪は声を立てることが出来なかった。両隣りにも人家がありながら、声を立てたら命がないとおどされているので、彼女は身をすくめたまま溜池のふちまで連れて行かれた。

長太郎はあたりに往來のないのを見て、自分の女房になつてくれとお雪に迫った。おどろいて返答に躊躇していると、長太郎はいよいよ迫つて、もし自分の云うことを肯かなければ、おまえを殺してこの池へ投げ込んで、自分もあとから身を投げて、世間へは心中と吹ふいちよう聴きさせると云った。お雪はいよいよおびえて、しきりに堪忍してくれと頼んだが、長太郎はどうしても肯かなかつた。お雪はもう切羽せつぱつまったところへ、小僧の勇吉があとから駈けて来て、これも出刃庖丁を振りかざして、やにわに長太郎に斬つてかかった。二人は短刀と出刃庖丁とで鬪った。お雪は途方にくれて、誰かの救いを呼ぼうとして夢中で駈け出したが、もう気が転倒しているので反対の方角へ足を向けたらしく、あたかもこつちへ歸つて来る文字春に突き当たつたのであつた。

そう判つて見ると、いよいよ捨てては置かれないので、文字春はすぐに津の国屋へ知ら

せに行つた。店でもその報告に驚かされたらしく、若い者二人と小僧二人とが提灯を持って其の場へ駆け付けると、果たして長太郎と勇吉とが血だらけになって枯蘆の中に倒れているのを発見した。どつちも二、三カ所の浅手を負つた後に、刃物を捨てて組討ちになつたらしく、二人は堅く引つ組んだままで池の中へころげ落ちていた。刃物の傷はみな浅手で命にかかわるようなことはなかつたが、池へころげ落ちた時に、長太郎は運悪く泥深いところへ顔を突つ込んだので、そのまま息が止まつてしまった。勇吉は半死半生の体であつたが、これは手当ての後に正気にかへつた。

お雪を無事に送りとどけて貰つたので、津の国屋では文字春にあつく礼を云つた。しかし津の国屋よりもほかに礼を云つてもらいたい人があるので、文字春はさらに桐畑の常吉の家へと報らせに行つた。

「どうせ一人死んだことですから、そちらの耳へも無論はいりませうが、なるべく早い方がいいかと思ひまして……」

「いや、それはありがてえ」と、ちようど居合わせた常吉がすぐに出て来た。「よく知らせてくれた。じゃあ、これから出かけるとしよう。これでこの一件もたいがい眼鼻が付いたようだ。師匠、今にお礼をするよ」

思い通りに礼を云われて、文字春は満足して帰った。かれはもう死霊の怖いことなどは忘れていた。ちつとぐらい祟られてもいいから、自分も立ち入ってこの事件のために働いて見たいような気にもなった。

常吉はすぐに津の国屋へ行ってみると、勇吉の傷は右の手に二カ所と、左の肩に一カ所であったが、どれも手重いものではなかった。それでもよほど弱っているらしいのを常吉はいたわりながら、町内の自身番へ連れて行った。

「おい、小僧。おめえはえれえことをやったな。命がけで主人の娘の難儀を救ったんだ。お上から御褒美が出るかも知れねえぞ。しかしおめえはどうして刃物を持って長太郎のあとから追っかけて行ったんだ。あいつが娘を連れ出すところを見ていたのか」

弱つてはいたが、勇吉は案外はつきりと答えた。

「はい、見ていました。長太郎が刃物でお雪さんをおどかして、無理にどこへか連れて行くこうとするのを見ましたから、空手からてじゃあいけないと思つて、すぐに台所から出刃庖丁を持ち出して行きました。そうして溜池のところで追っ付いたんです」

「よし、判った。だが、まだ一つ判らねえことがある。おめえはそれを見つけたら、なぜほかの者に知らせねえ。自分一人で刃物を持ち出して行くというのはおかしいじゃねえか」

勇吉は黙っていた。

「ここが大事のところだ」と、常吉は諭すように云った。「おめえが褒美を貰うか、下げしゅ手人になるか、二つに一つの大事のところだ、よく落ち着いて返事をしろ」

勇吉はやはり黙っていた。

「じゃあ、おれの方から云うが、おめえは何か長太郎を怨んでいるな。娘を助ける料簡も無論だが、まだ其のほかに、いつそこで長太郎をやっつけてしまおうという料簡がありやあしなかつたか、どうだ。はつきり云え」

「恐れ入りました」と、勇吉は素直に手をついた。

「むむ、そうか」と、常吉はうなずいた。「よく素直に申し立てた。そこで、なぜ長太郎をやっつける気になった。長太郎になにか遺恨でもあるのか」

「どうも仇かたきのように思われてなりませんので……」

「かたき……。むむ、おめえは津の国屋の番頭の親類だということだな」

「はい。金兵衛の縁で津の国屋へ奉公にまいりました」

「その金兵衛の仇……。長太郎が金兵衛を殺したのか」と、常吉は念を押しした。

「どうもそう思われてなりません」と、勇吉は眼をふいた。

それには何か証拠があるかと常吉が押し返してきくと、勇吉は別に確かな証拠はないと云った。併しどうもそう思われてならない。金兵衛は自分の親類であるが、決して主人と不義密通を働くような人間ではない。かれの死骸を土蔵の中で発見した時から、これは自分で首をくくったのではない、誰かが彼を絞め殺してその死骸を土蔵の中へ運び込んだのに相違ないと判断したが、何分にも確かな証拠がないので、自分はよんどころなしに今まで黙っていたのであると、勇吉は申し立てた。それにしても、数ある奉公人の中でどうして長太郎一人を下手人と疑ったのかと、常吉はかさねて詮議すると、その前日の午ひるすぎに長太郎が主人の娘に向って何か冗談を云った。それがあまりにしつこいのと猥みだりがましいのとで、帳場にいた金兵衛が聞き兼ねて、大きい声で長太郎を叱り付けた。叱られた長太郎はさすが起って行つたが、その時に彼は怖い眼をして金兵衛をじろりと睨んだ。その鋭い眼つきが今でも自分の眼に残っていると勇吉は云った。

併しそれだけのことでは表向きの証拠にならないので、勇吉は口惜しいのを我慢していると、今夜の事件が測らずも出しゅったい来した。憎らしい長太郎が主人の娘を脅迫して、どこへか連れて行こうとするのである。今年十六の勇吉はもう堪忍ができなくなつて、いつそ彼を殺してお雪を救おうと、咄とっさ嗟のあいだに思案を決めたのであつた。

「よし、よし、よく申し立てた」と、常吉は満足したようにうなずいた。「傷養生をして後日ごにちの御沙汰を待っている。かならず短気を出しちやあならねえぞ。金兵衛の仇はまだほかにも大勢ある。それは俺がみんな仇討ちをしてやるから、おとなしく待っている」

「ありがとうございます」と、勇吉は再び眼を拭いた。

勇吉をいたわって、あとから津の国屋へ送ってやるようにと町役人ちやうに云いつけておいて、常吉はすぐに津の国屋へ引り返して行こうとして、文字春の家の前を通りかかると、家中では何かけたたましい女の叫び声がきこえた。それが耳について思わず立ちどまる途端に、水口みずくちの戸を押し倒すような物音がして、ひとりの女が露路の中から転がるように駆け出して来た。つづいて又一人の女が何か刃物をふり上げて追って来るらしかった。常吉は飛んで行って、あとの女の前に立ちふさがると、女は夜叉やしやのようになって彼に斬ってかかった。二、三度やりたがわして其の刃物をたたき落して、常吉は叫んだ。

「お角、御用だ」

御用の声を聞くと、女は掴まれた腕を一生懸命に振りはなして、もとの露路の奥へ引り返して駆け込んだ。常吉はつづいて追ってゆくと、逃げ場を失ったものか但しは初めから覚悟の上か、かれはそこにある井戸側に手をかけたと思うと、身をひるがえして真つ逆さかさ

まに飛び込んだ。

長屋じゅうの手を借りて常吉はすぐに井戸の中から女を引き揚げさせたが、かれはもう息が絶えていた。それが文字春の世話で津の国屋へ奉公に行つたお角であることは、常吉も初めから知つていた。文字春の話によると、たつた今その水口の戸をそつとたたいて師匠に逢いたいという者がある。この夜更けに誰か知らんと思ひながら、文字春は寝衣ねまきのままで出て見ると、それはかのお角で、お前が余計なおしやべりをしたもんだから何もかもばれてしまったと云いながら、隠していた剃かみそり刀でいきなりに斬つてかかったので、文字春はおどろいて表へ逃げ出したというのであつた。

「大方そんなことだろうと思つた。だが、まあ、怪我がなくてよかつた」と、常吉は云つた。

女房と番頭と二人の死人を出した津の国屋では、それから十日も経たないうちに、又もや長太郎とお角と二人の死人を出した。しかし、これで丁度差し引きが付いたのであるといふことが後に判つた。

津の国屋のお藤を絞め殺したのは、女中のお角であった。金兵衛を絞め殺したのは、勇吉の想像の通りに若い者の長太郎であった。かれらは女房と番頭が熟睡しているところを絞め殺して、二つの死骸をそつと土蔵の中へ運び込んで、あたかも二人が自分で縊れ死んだようによそおったのであった。

津の国屋の親戚で、下谷に店を持っている池田屋十右衛門、浅草に店を持っている大榎屋弥平次、無宿のならず者熊吉と源助、矢場女お兼、以上の五人は神田の半七と桐畑の常吉の手であげられた。津の国屋の菩提寺の住職と無宿の托鉢僧とは寺社方の手に捕えられた。これでこの一件は落着らくちやくした。

これまで書けば、もう改めてくわしく註するまでもあるまい。池田屋十右衛門と大榎屋弥平次と菩提寺の住職と、この三人が共謀して、かねて内福の聞えのある津の国屋の身代を横領しようと巧んだのであった。津の国屋の主人次郎兵衛は貰い娘このお安をむごたらしく追い出して、とうとう変死をさせたことを内心ひそかに悔んでいた。殊に惣領娘のお清があたかもお安と同一年で死んだので、彼はいよいよそれを気に病んで、おりおりには菩提寺の住職に向って懺悔話をすることもあった。それが彼等三人に悪計を思い立たせる根

源で、坊主が一人加わっているだけに、かれらはお安の死霊を種にして津の国屋の一家をおびやかそうと企てた。

今日から考えると、頗る廻り遠い手段のようではあるが、その時代の彼等としては余ほど巧妙な手段をめぐらそうとしたのかも知れない。かれらはまず死霊の祟りということ云い触らさせて、津の国屋一家に恐れを懐かせ、さらに菩提寺の住職から次郎兵衛をおどして、体よく隠居させて自分の寺内へ押し込めてしまふつもりであつた。そうすれば、いやでも娘のお雪に婿を取らなければならぬ。その婿には池田屋十右衛門の次男を押し付けるという段取りで、だんだんにその計略を進行させることになつた。しかし堅気の商<sup>あきん</sup>人や寺の坊主ばかりでは、万事が不便であるので、かれらは浅草下谷をごろ付きあるいている無宿者の熊吉と源助とを味方に抱き込んだ。

お安の幽霊に化けたのは、浅草のお兼という矢場女で、見かけは十七八の初心<sup>うぶ</sup>な小娘らしいが、実はもう二十を二つも越しているという莫蓮<sup>ぼくれんもの</sup>者で、熊吉の世話でこれもこの一件の徒党に加わつたのであつた。熊吉と源助は津の国屋の近所を徘徊して、絶えずその様子<sup>う</sup>をうかがっているうちに、お雪の師匠の文字春が堀の内へ参詣に行つて、その帰り路はきつと日が暮れるのを見込んで、撫子の浴衣をきたお兼を途中に待ち受けさせて、怪談<sup>が</sup>

かつたお芝居を演じさせたのであつた。しかし文字春が迂濶うかつにそれを世間に吹聴しないらしいので、かれらは的あてがはずれた。今度は手をかえて、怪しい托鉢僧を津の国屋の前に立たせた。お兼は女中たちの湯帰りをおどした。

それでどうにかこうにか次郎兵衛だけはこつちへ人質ひとじちに取つてしまつたが、女房と番頭とが案外にすっかりしていて、かれらの目的も容易に成就しそうもないので、かれらは少し焦れ出して更に残酷な手段をめぐらすことになつた。お兼は叔母のお角を津の国屋へ住み込ませて、隙を見て女房と番頭とを亡き者にしようと思つたが、さすがにお角一人では荷が重いので、店の若い者の長太郎を味方に引き込もうとした。長太郎はふだんから主人の娘のお雪に思いをかけているので、これが首尾よく成就すればかならずお雪と添わせやるといふ条件で、とうとう悪人の仲間に入れてしまった。そうして女房と番頭とが不義を働いているらしいということをお角の口から前以つて吹聴させて置いて、よい頃を見測らつて二人の悪人が予定の計画通りに女房と番頭とを亡ほろぼした。しかもそれを巧みに心中と見せかけて世間を欺き、あわせて検視の役人の眼を晦くらました。

これまでは先ず彼等の思いのままに進行したが、その秘密を桐畑の常吉に嗅ぎ付けられたらしいのが、彼等におびただしい不安をあたえた。常吉は文字春から委くわしい話を聴いて、

半七と相談の上で先ずその幽霊の身許詮議に取りかかった時に、半七がふと思ひ付いたのは彼かのお兼のことであつた。お兼はいつまでも初心うぶらしく見えるのを種として、これまでに小娘に化けて万引や騙りを働いた兇状がある。もしや彼女ではあるまいか眼串を刺して、子分の者に云い付けてひそかに彼女が此の頃の様子を探らせると、お兼は先頃浅草の小料理屋へ行つて池田屋十右衛門に逢つたことが判つた。池田屋は津の国屋の親類である。もう一つには、かの熊吉が大榎屋へ忍んで行つて、ときどきに博奕の資本もとを借り出して来るらしいことが、彼の仲間の口から洩れた。大榎屋も津の国屋の親類である。それから疑いはいよいよ深くなつて、半七は遠慮なしに熊吉を引き揚げてしまった。しかし彼もなかなかの強情者で、容易にその秘密を白状しなかつた。

たとい白状しても、白状しないでも、徒党の一人が引き揚げられたと聞いて、かれらは俄かにうろたえ始めた。源助はあわてて何処へか姿をかくした。それが津の国屋の方へもきこえたので、お角も長太郎もぎよつとした。お角は文字春の家の小女をだまして、師匠の口から常吉にいろいろのことを訴えられたらしいことを探り知つたが、大胆な彼女はわざと平気で澄ましていた。しかし年の若い長太郎はなかなか落ち着いていられた。彼は破れかぶれの度胸を据えて、いつそお雪を脅迫して何処へか誘拐して行こうと企てた。

が、それを勇吉に妨げられて、自分は溜池の泥水を飲んで死んだ。

こうなると、お角もさすがに平気ではいられなくなつた。そのまますぐに姿を隠してしまえば、或いはもう少し生き延びられたかも知れなかつたが、こうした女の習いとして彼女は文字春をひどく憎んだ。何をしゃべつたか知らないが、男のいい岡つ引を引つ張り込んで、酒を飲ませてふざけながら、自分たちの秘密を洩らしたかと思うと、お角はむやみに文字春が憎らしくなつて、行きがけの駄賃に殺すつもりか、それとも顔にでも傷をつけるつもりか、ともかくも彼女の家へ押掛けて行つたのが運の尽きで、お角はわが身を井戸へ沈めることとなつたのである。勿論、死人に口なしで、お角がほんとうの料簡はよく判らない。事情の成行きで唯こう想像するだけのことであつた。

徒党の者はすべてその罪状を白状した。源助は一旦その姿を晦くらましたが、千住の友達へ立ち廻つたところを捕えられた。主犯者の池田屋と大榭屋は死罪、菩提寺の住職とお兼は遠島、その他の者は重追放を申し渡された。

これでこの怪談は終つたが、ついでに付け加えて置きたいのは、その明るる年に桐畑と津の国屋とに二組の縁談の纏まとまつたことであつた。一方は常吉と文字春とで、一方は勇吉とお雪であつた。常吉は二十六で、文字春は二十七であつた。勇吉は十七で、お雪は十八

であつた。もつとも、津の国屋の方は約束だけで、ほんとうの祝言はもう一年繰り延べることとなつたが、二組ともに一つずつの年上の嫁を持つというのは、そこに何かの因縁があつたのかも知れないと、大工の兼吉は仔細ありそうに話していた。

「どうです。かなり入り組んでいるでしょう」と、半七老人は笑いながら云つた。「くどくもいう通り、随分廻り遠い計略で、今日の人達から考えると、あんまり馬鹿々々しいように思われるかも知れませんが、第一には何といつても昔の人間は気が長い。もう一つには金儲けということがなかなかむずかしかつたからです。津の国屋——津国屋と書くのがほんとうだそうです。暖簾にはやはり津の国屋と、のの字を入れてありました。読みいためでしよう——は何でも地所家作を合わせて二、三千両の身代だつたそうです。その頃の二、三千両と云えばこの頃の十万円ぐらゐに当るでしょうから、それだけのものをただ取るには並大抵のことではむずかしい。大勢の人間が知恵をしぼって、暇をつぶしても二、三千両の身代を乗つ取れば、まず大出来だつたんでしようよ。今日のようにボロ会社を押し立てて新聞へ大きな広告をして、ぬれ手で何十万円を掻き込むなんていう、そんな器用な芸当をむかしの人間は知りませんからね。十万円の金を儲けるにも、これほど手

数がかかった芝居をしたんです。それを思うと、むかしの悪党は今の善人よりも馬鹿正直  
だったかも知れませんか。あはははははは」

これもやはりほんとうの怪談ではなかった。わたしは何だか一杯食わされたような心持  
で、老人の笑い顔をうっかりと眺めていた。

# 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行

※「文字春はよいよい」を「文字春はいよいよ」に改めるにあたっては、「半七捕物帳 第二輯」新出版社、1923（大正12）年7月20日発行、「定本 半七捕物帳 第二巻」早川書房、1956（昭和31）年1月25日発行、「半七捕物帳（一）」青蛙房、1966（昭和41）年3月20日発行を参照しました。

入力：tat\_suki

校正：（い）ま（い）ま

1999年8月2日公開

2007年11月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 半七捕物帳

## 津の国屋

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>